

## 内臓リーシュマニア症の尿診断法の開発

伊藤 誠<sup>1</sup> ISLAM MOHAMMAD ZAHIDUL<sup>1</sup> 高木 秀和<sup>1</sup> 橋口 義久<sup>2</sup> 木村 英作<sup>1</sup>愛知医科大学 医学部 寄生虫学<sup>1</sup> 高知大学 医学部 社会医学講座 寄生虫学教室<sup>2</sup>

内臓リーシュマニア症は、世界47カ国で流行が見られ、約2億人が流行地に住み、毎年10万人が新たに感染している。患者の多くはインド、バングラデシュ、ネパール、スーダンで発生している。この原虫疾患の診断には、脾臓や骨髄中に原虫を検出する方法が確実であるが、検出感度が悪いこと、どこでも実施できる検査ではないこと、患者に苦痛を与えることなどの問題点がある。着色した原虫自身を用いた凝集法(DAT)は、簡便で感度も高いことから広く用いられており、最近では血清中のリコンビナント抗原に対する抗体を検出する、イムノクロマト法を用いたキットも発売されている。我々は、採取が容易で血清より安全な尿を用いた内臓リーシュマニア症の診断法を開発し報告してきた。この診断法はELISA法で尿中に抗体を高感度に検出する方法であるが、プレートリーダーなどの機器が必要である。現地で結果を得るためには、肉眼で結果がわかるDATなどの凝集反応などが適しているが、尿中の微量な抗体を検出するには感度を高める必要がある。今回我々は、従来のDAT抗原を用いた、より高感度な方法を開発し、尿中の抗体検出に応用したので報告する。内臓リーシュマニア症患者尿はバングラデシュで採取したものをを用いた。ヒト抗体に対する抗体で処理した96ウェルマイクロタイタープレートを用い、尿を反応させた後、着色した*Leishmania donovani* promastigoteを加え、凝集を観察した。その結果、内臓リーシュマニア症患者56例中55例(98%)が陽性と判定された。またendemic normal 13例、日本人24例全例が陰性と判定され、この方法が、感度・特異性ともに高いものであることがわかった。本法は検体に採取が容易な尿を用い、簡単な手技で診断ができる点において、フィールドに適した診断法と考えられた。

---

Development of a sensitive and simple diagnostic method for visceral leishmaniasis using urine samples

MAKOTO ITOH

Dept of Parasitology, Aichi Medical Univ School of Medicine, Aichi, Japan